

孺恋郷土資料館長

関 俊明さん

今月は、この4月から新たに孺恋村の郷土資料館長になった関 俊明さんです。

3月まで群馬県職員として長く埋蔵文化財調査の第一線で活躍してきた関さんは、ハッ場ダムに伴う流域の発掘調査に多く携わり、主に天明の浅間山噴火で引き起こされた泥流による災害を究明してきました。調査によって当時の実態を掘り起こしてきた縁も繋がって、引き続き資料館長として「天明三年」に取り組む。発掘一筋ですかと聞けば、大学ではモノづくりの技術科を専攻していたと意外なお話し。

でも学位論文をもとにした著書は「災害を語り継ぐ」だったというからやはり因果あったのかも(笑)。驚いたのは、流域の災害調査の成り行きから、とうとう群馬の下流の玉村から孺恋まで歩いてみた、というからまさに天明はライフワークで天命かもしれません。

ところで関さん達の調査によると利根川沿いには天明災害に関する石造物が178基以上あり、その所在関係をデジタルデータで確認できるシステムがこの6月からネット上で公開、閲覧できるようになったというので楽しみです。試作版をQRコードで見ることができます。

これからの資料館についてどうと「鎌原村の暮らしと郷土の展示を見直していきたい」と所信。東吾妻町在住、子どもは独立して妻と母親の3人住まい。博士(歴史学・国学院大学)

災害記念碑デジタルアーカイブマップ
(天明三年浅間災害関連石造物)



▲災害記念碑デジタルアーカイブマップ

孺恋郷土資料館と国立研究開発法人防災技術研究所は、天明三年浅間災害記念石造物に関する共同展示を令和2年5月29日より実施しています。歴史文化財と減災文化の融合させた展示として公開していく予定です。天明三年浅間災害は1783年に発生した浅間山の噴火による火砕流や火山灰、土石なだれ、泥流などによる被害です。地域に残る被害から復興の歩みや防災の学びとすることを目指しています。



活動報告

浅間山北麓ジオマップ~火山と自然と人を繋ぐ~マップが出来ました。ぜひご利用ください。



災害の伝承の大切さ

日本大学文理学部非常勤講師 矢島道子氏

私たちが災害の伝承の大切さを身に染みて感じたのは2011年の東北地方太平洋沖大地震の時ではないでしょうか。「津波でんてんこ」という言葉がもっときちんと伝えられていたら、もっと多くの人々が津波の被害を免れることができたのではないのでしょうか。

日本では災害はどのように伝承されてきたのかと調べた結果が高橋和雄編『災害伝承—命を守る地域の知恵—』として出版されています。雲仙普賢岳噴火は寛政(1792)の「島原大変肥後迷惑」と平成(1991)の例、桜島大正噴火を伝える記念碑、東北大震災の震災遺稿保存の例などがその例として載っています。とりわけ一番驚嘆するのは、長崎市山川河内(さんぜんごうち)地区で150年毎月続「念仏講まんじゅう」の例です。

1982年長崎県南部を豪雨が襲い、主に土砂災害で299人の死者・行方不明者をだしました。太田尾町山川河内でも土石流が発生し家屋などに被害を生じたものの一人の死傷者も出ませんでした。この地区は江戸時代末期1860年に土砂災害が発生し、33人の犠牲者を出したことがありました。以来、犠牲者への供養と災害を忘れないために、毎月14日に饅頭などを持ち回りで全戸に配るこの地域独特の行事「念仏講」が行われてきたそうです。最近では業者の作った饅頭を利用しているが、配るものはなんでもよかったといいます。地区の子どもたちは、14日には美味しいもの食べられると楽しみにしていて、食べているときにその由来を教わったそうです。地区では当番は3年に1回くらい回ってきます。一時中止にしたら、病気が流行って大変だったので、それ以来、決してやめなかったそうです。「念仏講」という名前がついていますが、行事としては饅頭の配給が行われるだけです。1982年の豪雨のときは、それぞれの家で、1860年の災害の詳細が伝わっていて、どのように避難したらよいか、方針がたてられたそうです。

浅間の鎌原観音堂の階段のことは、教科書にも出ていて、知っていましたが、そこに災害の伝承をずっと伝えている人々がいることは知りませんでした。2020年に初めて訪れて200年も続いていることに感動しました。和讃を唱えるまわり念仏は月2回あり、春の彼岸の入りには「みご団子」を作るそうです。幸い、鎌原は2回目の災害はありませんが、この伝承は鎌原の人々の誇りであり、未来へ伝えていくべき素晴らしい財産でしょう。



▲浅間山噴火大和讃



▲みご団子

ジオパーク総合インフォメーションセンターの展示が新しくなりました。パナーやデジタルサイネージが導入されました。



1月28日にバイオトラスト軽井沢牧場に取材に行ってきました。浅間開拓から酪農の繁栄についてお話しして頂きました。



あさまびと



浅間山北麓 開拓の歴史

浅間山北麓開拓の歴史は、明治以降洋服の需要が増え、た事で綿羊の供給地として、また、軍馬の養育地として浅間高原一帯が選ばれ、北白川宮能久親王が浅間高原に牧場を開設したのと同時に、旧館林藩藩士が明治の改革で職を失った事から開拓民として、現在の長野原町応桑の御所平に入植したのが始まりでした。そして終戦後、長野原町大屋原に満州などからの引揚者が入植し、荒れ果てた大地を農地や牧場へと開拓していきましました。しかし、浅間高原の痩せた火山灰土では作物を育てるのも大変でしたが、試行錯誤を繰り返して、牧場では開拓当初十七頭の牛は二十年後には千頭余まで増え、現在では四千頭の牛が飼育されています。また、夏から秋にかけて、ヤ、タス、とうもろこしなどの高原野菜の産地としても知られるようになりました。今回はそんな浅間山北麓の開拓の歴史とともに、黒ク土や酪農の事の特集してみました。



▲孺恋村高山蝶を守る会



▲浦野安孫氏

『孺恋村高山蝶を守る会』が環境省自然環境局長賞を受賞しました。地元で舞うとても貴重な高山蝶パトロール活動を行っています。また、その生息調査、環境の整備、広報啓発に努めるなどして保全活動に取り組んでいます。そのことが高く評価されて表彰されました。

浦野安孫氏が林野庁官長感謝状を受賞しました。浦野氏は平成20年より4年間群馬県環境アドバイザーとして吾妻渓谷の自然活動に関わり、緑のインタープリターとして環境教育に尽力し、子供達の自然保護意識や実践意欲の向上に貢献されています。また、浦野氏は同活動が認められ、群馬県総合表彰も受賞されています。

浦野氏及び孺恋村高山蝶を守る会は浅間山北麓ジオパークと連携し、多くの方が将来にわたって地域の魅力を知り、利用できるよう保護を行っています。

発行元：浅間山ジオパーク推進協議会

Mt. Asama Geopark Promotion Council
〒377-1524 群馬県吾妻郡孺恋村大字鎌原494-45
TEL/FAX: 0279-82-5566
URL: www.mtasama.com
E-mail: geo-asama@vill.tsumagoi.gunma.jp
Facebook: www.facebook.com/asamageopark
制作担当：広報・観光委員会

ガイドの受付しています

「浅間山北麓ジオパークガイドの会」の認定ガイドによる案内の受付をしています。ご希望の方は、左記、推進協議会事務局までお申し込みください。
【料金表：ジオガイド1人あたり】
半日¥5,000~8,000 ジオガイド1人につき
1日¥10,000~16,000 15名位までガイド可

編集後記

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、春号でお知らせした予定についてすべて中止となりました。大変申し訳ありませんでした。



白黒写真は全て「長野原町100年のあゆみ」より

農地をひらく開拓

浅間山北麓地域は、中央高地式気候（中央高原型）で気温が低く、雪が降ります。しかも火山性の土壌でやせています。作物をつくるには不向きな土地でした。明治になり開拓が始まりますが、本格的に農地をひらくのは食料不足がきびしくなってきた昭和20年以降になります。また、戦後満州等から引揚者の仕事がなく、住むところがないという事情もありました。そこで国は、農地拡大政策を打ち出し、人の入っていない原野を切りひらくことを推し進めます。

浅間山北麓に開拓者が入ってきました。家は、落葉松を切り倒し柱にし、熊笹を刈り取って壁や屋根をふきました。開拓に使う機械がないため、一本一本のこぎりで木を切り倒し、根を抜き取り、熊笹を焼払って畑にしていきました。朝は、星のあるうちから夜は星の明かりで食料がなく三度の食事を二度にして毎日開墾をしました。

今現在、切り開かれた畑にはとうもろこし、キャベツなど高原野菜が植えられています。りんご等の果樹園も見られます。また、牧草地には牛が草を食べている姿を見ることができます。



日本の気候区分図 ▶

夏。浅間山北麓は一年の中で一番活気あるシーズンを迎えています。冷涼な気候を生かして栽培される高原野菜の収穫が始まり、全国各地に配送作業で賑わいます。古くから続く酪農では夏の草原を利用して、牛の生育、管理に最適な季節です。今月は、開拓に伴って一大農業地帯が築かれてきた北麓の今昔にスポットを当ててみました。そこには驚くべき大地、土壌の秘密と開拓の苦難がありました。



▲黒ボク土の分布図

北麓は黒ボク土の世界標準地！

◆世界でたった1%の黒ボクの大地、土壌
浅間山北麓の大地はすべて浅間山の噴出物で出来ています。厚く堆積した火山灰によって造られている表土が「黒ボク」の土。黒ボク土は、この辺りでは古くから「のぼう土」と呼ばれ、見かけによらずの役立たずの痩せ地として嫌われてきた経緯があります。そのイメージが180度変わったのは第2次大戦後でした。火山灰土壌には強いクセがあり、土壌中に蓄えた有機物を捕まえて離さないために作物が吸収することができない土であることが判り、化学肥料の進歩によってクセが克服され、開拓に拍車がかかったのです。もともと黒ボクには荒い石が少なく、粒が小さいので作物の根が伸びやすく、適度な保水力があるうえ、有機物（腐食物）も豊かで層も厚いので根菜類に適した土壌だったのです。

◆世界で優れた農業向きの黒ボク
いま、世界の土壌にはその性質によって概ね12種類に分類されています。農業に優れた土とは養分をどれほど蓄えているかということと、土の粒の大きさや保水力、さらに耕しやすさ、収穫のしやすさ等によって評価されています。もっとも肥沃なのはウクライナ、ロシア、中国などに分布している「チェルノーゼム」という土壌です。黒ボクは第3位にランクされる実力派。因みに最下位には「砂漠土」や永久凍土の「泥炭土」。ところで、黒ボクが黒い理由は腐食によるものとか焼畑のせいだとか言われていますがハッキリしたことは分かっていません。それから、ウクライナなどの優れた土は数千年以上掛かって造られるのに対して、黒ボクは数百年単位で形成されるという、世界でも極めてまれな土壌です。

火山灰土を切りひらく



高原開拓による酪農

戦後入植し酪農を始めた世代から現在三代目が跡を継ぎ始めていますが、当初120軒ほどあった酪農家は30軒ほどになっています。酪農経営を維持するためには一家族当たり50頭は飼わないと難しいと言われる、300頭以上を飼育する牧場はメガファームと呼ばれます。この地でメガファームを営むバイオトラスト軽井沢牧場（代表 眞下豊）の今をご紹介します。本牧場には約700頭余の乳牛が飼育されています。その内、生まれた約150頭の子牛は、生後4か月で北海道に運び、1年半ほど育ててもらって戻す分業体制

がとられ、経営の効率化を図っています。また、安全と高い品質の維持も経営維持の大切な条件であるため、品種の更新には北米産を利用し、良い干し草を海外から導入する等、関係企業等は国内に留まりません。食事は一日2回、搾乳は3回、1頭から1日約30kg余の牛乳が搾乳機を通して大型の保冷タンクに集まり、専用集配車で出荷されます。家族を含めた従業員、パート、アルバイトにより多種に亘る業務が済々と行われています。最近ではチーズ製造を行い、経営の幅を拡げる試みも進められています。



中間の黒いのは埋没黒ボク土壌、上面は黒ボクの表土

バイオトラスト軽井沢牧場

バイオトラスト軽井沢牧場